

イザヤ書18-20章「世の力と栄え」

1A クシュの力 18

1B 力への誘い 1-2

2B 静まって眺める主 3-7

2A エジプトの栄光 19

1B しなえる心 1-15

1C かき乱す方 1-4

2C 命の枯渇 5-10

3C 知恵の愚かさ 11-15

2B 送られる救い主 16-25

1C 癒しのために打たれる主 16-22

2C 三国の祝福 23-25

3A 裸の徴 20

本文

イザヤ書 18 章を開いてください。私たちの学びは、イスラエルの周辺国に対する主の宣告のところを読んでいます。そして今回は、モアブとダマスコに対する宣告を読みました。今日は、クシュ（エチオピア）とエジプトに対する宣告です。北から攻めてくるアッシリヤの進出にどのように対抗するのか、それが国の生き残りの至上命題でした。しかし、そのような危機こそ、それぞれの国が持っているありのままの姿が浮き彫りにされます。ペリシテであれば、「いつも反抗し、事あれば人に挑みかかる」態度が露わにされました。モアブであれば、「自分は十分に必要なものはあるから、神に頼る必要はない」という安逸が明らかにされました。ダマスコに対しては、いやダマスコに対する以上に北イスラエルでした、不信者と頸木をいっしょにする姿が露わにされました。

このように主は、横暴で凶暴なアッシリヤを用いられて、一人一人の心の底辺にあるものを明らかにされている訳です。それで、シオンにおられる主に立ち返れ、と呼びかけておられます。平穏な時には、隠せている本当の自分、他人だけでなく自分自身をさえ欺いてしまっているので、なかなか見えてこない自分がありますが、主は時に、戦争の脅威を用いられます。私たちに、自分自身を探ること、そして主にのみ拠り頼むことを、教えてくださいます。

18 章から 20 章は、17 章 12 節からの続きになっています。先週読みましたが、もう一度読んでみましょう。「17:12 ああ。多くの国々の民がざわめき、海のとどろきのように、ざわめいている。ああ、国民の騒ぎ、大水の騒ぐように、騒いでいる。17:13 国民は、大水が騒ぐように、騒いでいる。しかし、それをしかると、遠くへ逃げる。山の上で風に吹かれるもみがらのよう、つむじ風の前でうず巻くちりのように、彼らは吹き飛ばされる。17:14 夕暮れには、見よ、突然の恐怖。夜明

けの前に、彼らはいなくなる。これこそ、私たちから奪い取る者たちの分け前、私たちをかすめ奪う者たちの受ける割り当て。」イザヤは、アッシリヤがこの地域に押し寄せていることを、海の荒波のようなどよめきとして表現しています。そして、主がそれを風に吹かれるもみ殻のように吹き飛ばされることを約束してくださっています。

そして 18 章から、このような騒ぎに対して、挑戦を受けている国々も騒いでいることに対して戒めを与えておられます。

1A クシュの力 18

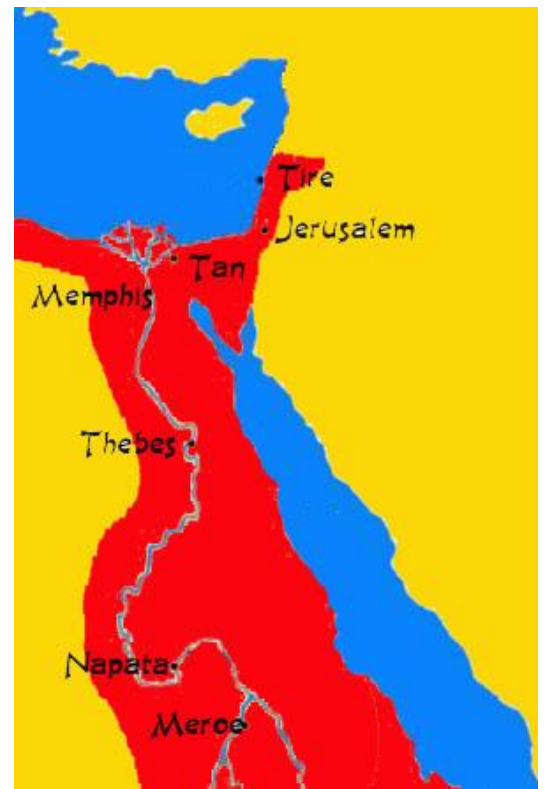
1B 力への誘い 1-2

18:1 ああ。クシュの川々のかなたにある羽こおろぎの国。18:2 この国は、パピルスの船を水に浮かべて、海路、使いを送る。すばやい使者よ、行け。背の高い、はだのなめらかな国民のところに。あちこちで恐れられている民のところに。多くの川の流れる国、力の強い、踏みにじる国に。¹

クシュは、ノアの息子ハムの息子として初めて出てきます。「ハムの子孫はクシュ、ミツライム、プテ、カナン(創世 10:6)」とあります。ミツライムはエジプトの別名となり、プテはリビアです。クシュはエチオピアとも訳されますが、今のエチオピアよりもはるかに広域を支配していました。エジプトの南に位置して非常に栄えた文明です。「羽こおろぎ」とありますが、これはエチオピアが非常に蒸し暑く、羽の付いた虫が多いことで有名だからです。エジプトと同じようにナイル川上流の川々によって非常に発展して、一時期はその勢力範囲をナイル川全域とイスラエルのところまで及ぼしていました。それで、ここ「クシュの川々」とはナイル上流の支流のことを指しています。

当時ピアンキというクシュの王が、紀元前 730 年ごろからエジプトを支配し始めました。そして、エジプトの国を 715 年から治め、第 25 エジプト王朝が始まりました。ですから、当時のエジプトはクシュと重なっていたと考えていいです。しかし紀元前 671 年にアッシリヤがエジプトに侵攻しました。その時にクシュはエジプトから撤退しました。

2 節に「背の高い、はだのなめらかな国民のところに。あちこちで恐れられている民のところに。」とありますが、これはクシュ人たちが自らを誇っている言葉です。今、イスラエル旅行で遺跡を見ると、当時の人々がどれだけ背が低かったのか分かりますが、おそらくクシュ人たちは現代の私た



¹ https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Kushite_empire_700bc.jpg

ちとあまり変わらない背丈だったのかもしれませんが、そして、「肌が滑らか」なことを誇っていますが、セム系のイスラエル人やその周囲の民族は体毛が多かったのでしょうか、彼らは今の日本人の男のようにそれほど体毛もなかったのでしょうか。また、エジプト人の祭司たちのように毛を剃っていたかもしれません。そして、「パピルスの船を水に浮かべて、海路、使いを送る。」とあります。クシュが使者をユダに送っているのです。ナイル川を下り、そこから地中海に出たのでしょうか、そしてユダに到着して、自分たちのところに、使者を送ってアッシリヤ対抗のための援軍を頼んで来いと言いつけています。午前礼拝で話しましたように、ユダがアッシリヤを恐れているので、この人間的な力に頼りなさいという誘いを受けているのです。

2B 静まって眺める主 3-7

18:3 世界のすべての住民よ。地に住むすべての者よ。山々に旗の揚がる時は見よ。角笛が吹き鳴らされる時は聞け。

クシュに対して主が語られています。クシュは自分たちがいかに力強いかをユダに誇示しましたが、主ご自身は「世界のすべての住民よ。地に住むすべての者よ。」と応じておられます。主は、全世界を相手にして、これからわたしの行なうことを見ていなさいと言われるのです。これはちょうど、450人のバアルの預言者に対抗するたった一人のエリヤのような感じであります。影響力を持っているかのように見えるバアルの力は、ヤハウエの神との力の前では無に等しいです。そして、「山々に旗の揚がる時は見よ。角笛が吹き鳴らされる時は聞け。」とされていますが、アッシリヤ軍がシオンの周囲の山々に旗を揚げ、角笛を吹き鳴らしているのです。

18:4 主が私にこう仰せられたからだ。「わたしは静まって、わたしの所からながめよう。照りつける暑さで暑いころ、刈り入れ時の暑いときの露の濃い雲のように。」18:5 刈り入れ前につぼみが開き、花ぶさが育って、酸いぶどうになるとき、人はその枝をかまで切り、そのつるを取り去り、切り除くからだ。18:6 それらはいっしょにして、山々の猛禽や野獣のために投げ捨てられ、猛禽はその上で夏を過ごし、野獣はみな、その上で冬を過ごす。

ここで大事なのは、「わたしは静まって、わたしの所からながめよう。」と言っていることです。アッシリヤが来ることは大きな騒ぎではありますが、その騒ぎをさらに煽るように力のあるクシュが騒いでいるところを、主は、「わたしは静まって、わたしの所からながめよう。」とされています。クシュの人たちによく分かるように、その静けさを彼らの気候を使って例えておられます。「照りつける暑さで暑いころ、刈り入れ時の暑いときの露の濃い雲のように。」とされていますが、じいっと、蒸し暑いところで動かない濃い雲のように、動じない、動かないということです。

そして、「刈り入れ前につぼみが開き、花ぶさが育って、酸いぶどうになるとき、人はその枝をかまで切り」とあります。これは、アッシリヤの横暴が実を結ぶまで主が待っておられる、その暴力の実がたわわになった時に一気に刈り込みを入れるということです。神の裁きは、忍耐深く、かつ試

されるものです。忍耐深いというのは、一人一人が悔い改め滅びを免れることができるまで待っておられる、ということであり、試されるというのは、裁きが速やかに行われぬように見えるので、「神は裁かない」と勝手に決めつけて、それで悪事を働くということです。そして、「山々の猛禽や野獣のために投げ捨てられ」とありますが、主に打たれて積み上げられたアッシリヤ軍の死体を、猛禽がついばむ姿を描いています。当時の人々は、死体がどのように埋葬されるかにその人に尊厳がかかっていましたが、これは最も卑しい姿であり、神の徹底した裁きを示しています。

18:7 そのとき、万軍の主のために、背の高い、はだのなめらかな民、あちこちで恐れられている民、多くの川の流れる国、力の強い、踏みにじる国から、万軍の主の名のある所、シオンの山に、贈り物が運ばれて来る。

ここに主の皮肉を込めた、エチオピアへの宣告の言葉があります。それは、これだけ自分たちの力を誇っていた彼らが、万軍の主のために、その名が付けられたエルサレムに贈り物を運んでくるということです。贈り物を携えるとは、お礼をしているのではなく、王に対する服従を示しています。つまり、シオンにおられる王に額づいている行為です。紀元前701年に、ヒゼキヤが王の時にアッシリヤ軍が倒れました。これで一気に、その全域の脅威が解かれました。そこでこの預言が実現します。「2歴代誌 32:23 多くの人々が主への贈り物を携え、ユダの王ヒゼキヤに贈るえりすぐりの品々を持って、エルサレムに来るようになり、この時以来、彼はすべての国々から尊敬の目で見られるようになった。」

そして、この歴史的出来事には終わりの日の予兆も見えます。ダニエル 11 章には、北の王と南の王の戦いが記されています。南の王とはエジプトです。そして北の王はシリアの王なのですが、途中で反キリスト本人に変わっています。そして次のように書いてあります。前回の学びで、モアブに対する預言も読みましたので、その部分も含めて読んでみましょう。「40 終わりの時に、南の王が彼と戦いを交える。北の王は戦車、騎兵、および大船団を率いて、彼を襲撃し、国々に侵入し、押し流して越えて行く。41 彼は美しい国に攻め入り、多くの国々が倒れる。しかし、エドムとモアブ、またアモン人のおもだった人々は、彼の手から逃げる。42 彼は国々に手を伸ばし、エジプトの国ものがれることはない。43 彼は金銀の秘蔵物と、エジプトのすべての宝物を手に入れ、ルブ人とクシュ人が彼につき従う。」反キリストは、エジプトに進出し、それからクシュ人のところにまで行きます。「付き従う」と訳されていますが、これは「足元」とも訳されるので、反キリストの足跡がクシュにまで付いたということです。

そして主イエスが来られます。そして、世界をご自身の支配の下に入れた時に、エルサレムに国々がそれぞれの贈り物を持ってきます。「60:4-6 目を上げて、あたりを見よ。彼らはみな集まって、あなたのもとに来る。あなたの息子たちは遠くから来、娘たちはわきに抱かれて来る。そのとき、あなたはこれを見て、晴れやかになり、心は震えて、喜ぶ。海の富はあなたのところに移され、国々の財宝はあなたのもとなるからだ。らくだの大群、ミデヤンとエファの若いらくだが、あなた

のところに押し寄せる。これらシェバから来るものはみな、金と乳香を携えて来て、主の奇しいみわざを宣べ伝える。」今、私たちは私たち自身を主への贈り物とすべきです。新約時代には、エチオピアの宦官が、イザヤ書から伝道者ピリポが解き明かして、それで信じてバプテスマを受けました。自分の魂を主に対する贈り物として捧げる国々の人々が起こされること、これが主の再臨の前に私たちがすべきことです。

私たちが主の内に留まるということは、主が「わたしの所からながめよう」と言われたように、高い所からこの世で起こっている騒ぎを眺めることができるという、静けさ、あるいは冷静さであります。そうした騒ぎに巻き込まれることなく、いかに留まることができるか？ということです。いかに、自分が世から聖められているか？そして、神の御心を世の荒波の中で選び取れているか？であります。

2A エジプトの栄光 19

1B しなえる心 1-15

1C かき乱す方 1-4

19:1 エジプトに対する宣告。見よ。主は速い雲に乗ってエジプトに来る。エジプトの偽りの神々はその前にわななき、エジプト人の心も真底からしなえる。19:2 わたしは、エジプト人を駆り立ててエジプト人にはむかわせる。兄弟は兄弟と、友人は友人と、町は町と、王国は王国と、相逆らって争う。19:3 エジプトの霊は其中で衰える。わたしがその計画をかき乱す。彼らは偽りの神々や死霊、霊媒や口寄せに伺いを立てる。19:4 わたしは、エジプト人をきびしい主人の手に引き渡す。力ある王が彼らを治める。…万軍の主、主の御告げ。…

エジプトに対する宣告です。エジプトが主の裁きを受けるその姿は、「わななく」という言葉に代表されます。豊かで強いように見えるのですが、実際は非常に脆弱であるということです。「速い雲に乗って」という言葉があります。これは、突如として雲が覆い、全体を暗くしてしまう雲だそうです。したがって、アッシリヤが南進してくる時にたちまち、自分たちが真っ暗になってしまったと恐れる姿です。

彼らがなんでそのようになっているのか、「偽りの神々」を拝んでいるからと言っています。エジプトは、何でも神にしていました。ナイル川、かえる、家畜、太陽、パロ自身などなど、主がエジプトに下された十の災いは全てエジプト人が神として拝んでいたものでした。これが、偶像礼拝の本当の姿です。自分たちの生活は安泰しています。けれども、何か不都合なことが起これば、役に立つ対象を求めます。それがいわゆる「お守り」のような、困った時の神頼みです。自分とその神々との関わりは、あまりにも軽々しいものです。さらっただけ付き合い、必要な時にだけ頼みに来る、しかも自分の利益にかなったのであればそれを神として採用します。しかし、まことの神との関わりはどうでしょうか？その関わりを持つために、血が流されるような真剣なものです。聖なる神は、私たちと交わりを持つためにキリストにあって血を流され、そして付き合ってくださいます。そして

私たちは、この方に愛に留まるために、私たちも自分自身の命を捧げて聞き従います。自分の生活がまずありき、というのが偶像礼拝ですが、神の国がまずありきまことの神の礼拝です。

そして、今、主はアッシリヤにとってエジプトを裁かれようとしています。アッシリヤが近づくにつれて、その脅威に対する心備えがなくなっています。2 節には、互いに歯向かわせると主は言われます。主は、ご自分の聖なる姿をアッシリヤの脅威を通してお示しになっているのです。しかし、自分のその生々しい姿は隠していますから、その不安を他の人々になすりつけるのです。これを互いにやっています。今の状況はまさにこれではないでしょうか。政府のせいにして、学校のせいにして、会社のせいにして、自分以外の誰かのせいにして、自分自身の問題に取り組むのを避けているのです。そのために対立が起こり、また分断や分離が起こります。

それから 3 節には、彼らの計画をかき乱すとあります。自分の計画はいつもその通りになると思いついて入っているので、それでかき乱すのです。ところが、そこで自分を低くして主の前に出ていくのではなく、占いや霊媒に頼るのです。信仰と希望と愛で生きなければいけないのに、その実質を求めではなく、自分の前にマニュアルがあればそれで安心するのです。状況によって、あっちに行き、こっちに行きます。ある時はこんな意見を言っていたのに、そのすぐ後で別の意見を言いません。心が定まらないのです。

神はそこまでさせて、それからアッシリヤの支配下に彼らを置くのです。それが 4 節です。先ほど話しましたようにアッシリヤの王エサルハドンが紀元前 671 年にエジプトを攻め、そしてそこからクシュが撤退しました。664 年に首都テーベを取っています。王はエジプトを 20 の州に分け、それぞれにアッシリヤ人の総督を就けて「略奪し、滅ぼせ」と命じたのです。そして、ここ「厳しい主人の手」「力ある王」という表現には、かつてイスラエルを奴隷にしていたパロのことが意識されているでしょう。イスラエルをかつて奴隷として酷使した同じことを、彼らが受けている、ということです。

2C 命の枯渇 5-10

19:5 海から水が干され、川は干上がり、かれる。19:6 多くの運河は臭くなり、エジプトの川々は、水かさが減って、干上がり、葦や蘆も枯れ果てる。19:7 ナイル川やその河口のほとりの水草も、その川の種床もみな枯れ、吹き飛ばされて何も無い。19:8 漁夫たちは悲しみ、ナイル川で釣りをする者もみな嘆き、水の上に網を打つ者も打ちしおれる。19:9 亜麻をすく労務者や、白布を織る者は恥を見、19:10 この国の機織人たちは砕かれ、雇われて働く者はみな、心を痛める。

ナイル川が干上がる預言です。ナイル川こそがエジプト文明の心臓部分になります。これが干上がるということは、エジプトそのものが萎えてしなびてしまうことを意味します。その裁きを神が行われます。しかし、アッシリヤがエジプトに侵攻した当時、このことが起こったという記録はありません。けれども、驚くべきことが近年起こっています。イスラエルが建国することは、エゼキエル 37 章等に見られるような終わりの日の徴ですが、その後でエジプトに起こったことも注目に値します。

ここに書かれているような環境破壊は、アスワン・ロウ・ダムを 1901 年にそしてアスワン・ハイ・ダムを 1970 年に建設完成させてから起こりました。ナイル川は、毎年洪水が起こっていました。それを止めるためにダムを建設しましたが、それが大きな被害をもたらすことになりました。洪水は、実は下流に沃土と呼ばれる肥えた土を運ぶのを手伝っていました。それが無くなります。さらに、洪水は、土壌中に有害な塩分があるのですがそれを流さなくなったことによって、塩分が土に蓄積され始めました。それで 6 節の言葉が起こりました。葦の根の部分にカタツムリが付くのですが、それも洪水によって流されていくものがくっついたままなので、葦が枯れてしまいました。7 節にあるように塩土によって農作業もできなくなりました。8 節ですが、栄養分を含んだ土が地中海に入り込んでいたので、そこはイワシ漁で盛んでした。それが入って来なくなったので、漁業が大打撃を受けました。そして 9 節ですが、亜麻は育てる時に水を必要としますが、なくなるためにその産業もだめになります。このように、アスワン・ハイ・ダムの完成によってこの言葉が実現したのではないか、と思われる現象が起こったのです。

3C 知恵の愚かさ 11-15

19:11 ツォアンの首長たちは全く愚か者だ。パロの知恵ある議官たちも愚かなはかりごとをする。どうして、あなたがたはパロに向かって、「私は、知恵ある者の子、昔の王たちの子です。」と言えようか。19:12 あなたの知恵ある者たちはいったいどこにいて、あなたに告げ知らせようというのか。万軍の主がエジプトに何を計られたかを。19:13 ツォアンの首長たちは愚か者、ノフの首長たちはごまかす者。その諸族のかしらたちは、エジプトを迷わせた。19:14 主が、彼らの中に、よろめく霊を吹き入れられたので、彼らは、あらゆることでエジプトを迷わせ、酔いどれがへどを吐き吐きよろめくようにした。19:15 それで、頭も尾も、なつめやしの葉も葦も、エジプト人のために、なすべきわざがない。

エジプトを豊かにし、栄光ある国にしていたのはナイルという天然資源の他に、学問がありました。モーセについて、ステパノはこう説明しています。「エジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、ことばにもわざにも力がありました。(使徒 7:22)」そしてソロモンの知恵の豊かさを表現するのに、列王記第一にはこう書いてあります。「彼は、…エジプト人のすべての知恵とにまさっていた。(4:30)」知恵と言ったら、エジプトだったのです。世界の学問の基礎はここから排出されていました。13 節には、ツォアン、またノフ(メンフィス)は、古代エジプトで首都であった期間がありました。長いエジプトの歴史の中で、知恵においても政治においても誇り高い町でした。ですから、数々起こる出来事について、そこにいる賢い者と呼ばれる者たちは説明し、解説し、何らかの解決法を出せるはずだと思っていました。しかし、エジプトに押し寄せているアッシリヤからの脅威は、そうした人の知恵を超えています。前例のないこと、彼らの知恵を超えていることなのです。それを主は、「万軍の主がエジプトに何を計られたか」と問いかけておられるのです。

私たちは、いつかどこかの時点で、自分たちにある知恵では今、起こっていることは説明できない

いことが数多くあります。それを、自分たちの頼ることのできる人間の知恵で説明しようとする性質を人間は持っています。しかし、それがいかに的外れで、無意味なことなのかを、神はこれからますます明らかにされていくでしょう。そんなことをしているうちに、エジプトではますますアッシリヤが迫っています。それで、彼らは自分の頼る葦がなくなるのです。葦なのですから、それによりかかれれば倒れるのですが、この世の知者たちをそのように表現しているのです。

2B 送られる救い主 16-25

1C 癒しのために打たれる主 16-22

19:16 その日、エジプト人は、女のようになり、万軍の主が自分たちに向かって振り上げる御手を見て、恐れおののく。19:17 ユダの地はエジプトにとっては恐れとなる。これを思い出す者はみな、万軍の主がエジプトに対して計るはかりごとのためにおののく。

「その日」という言葉が出ています。したがって、かつてのアッシリヤがエジプトに侵攻していたという歴史的出来事を超えて、その出来事を予型としてながら終わりの日について究極的に行なわれることを、主は語っておられます。主がエジプトに対して御手を振り上げるということです。どのように恐れをなすのかと言いますと、「ユダの地はエジプトにとっては恐れとなる。」とあります。ユダのために、主が強く働いておられて、エジプトは主が彼らのところにおられること、自分を打つ神がおられることを知るようになるということです。これが大患難の終わりに、反キリストがエジプトまでやって来て、それからキリストが来られるというシナリオの中で起こるのでしょうか。

ただ、その予兆でもあるかのような出来事は、過去に起こっています。イスラエル建国後のエジプトです。新生イスラエルに対してアラブの大国エジプトは、四度、中東戦争を起こしました。その全てに負けています。特に 1967 年の六日戦争では、エジプトが圧倒的な武力でイスラエルを全滅させることができると当時の大統領ナセルは思っていました。ところが、イスラエル空軍がエジプトの空軍基地に駐屯している戦闘機をことごとく破壊し、シナイ半島の制空権を奪われて、エジプト軍は戦わずして負けたことが、最も屈辱的だったそうです。このように、イスラエルに味方しておられる主なる神がエジプトに近づいているかを恐れおののくわけです。そして次に驚くべき神の救いのご計画が展開されます。

19:18 その日、エジプトの国には、カナン語を話し、万軍の主に誓いを立てる五つの町が起こり、その一つは、イル・ハヘレスと言われる。19:19 その日、エジプトの国の真中に、主のために、一つの祭壇が建てられ、その国境のそばには、主のために一つの石の柱が立てられ、19:20 それエジプトの国で、万軍の主のしるしとなり、あかしとなる。彼らがしいたげられて主に叫ぶとき、主は、彼らのために戦って彼らを救い出す救い主を送られる。

エジプトの全土で、何とイスラエルの神、主に対して立ち帰る出来事が起こるのです。かつて、イスラエルを虐げ、それゆえ神に裁かれたエジプトが、今は、イスラエルを救われた同じ神を自分た

ちの神にしていきます。ここで「カナン語」とありますが、これはカナンの地の言葉ということで、ヘブル語のことです。主を礼拝する時に、ヘブル人が使っている言語が出てくるということです。そして五つの町で万軍の主の誓いを立てますが、つまり全国的に主を礼拝する人々が起こされます。そして、真ん中に主のための祭壇とありますが、かつてヨシヤたちはカナンの地の真ん中、シエケムに石の板を立てました。そして、国境のそばにも石の柱を立てますが、それはユダの国に対して、「私たちは、あなたがたの神をあがめています。」ということを示しているのです。かつて、ヨルダン川の東岸に住み始めたマナセ半部族、ガド族、ルベン族がヨルダン川の川岸に祭壇を造ったのと同じです。そして、彼らが主に叫びます。反キリストに彼らも虐げられているからでしょう、けれども救い主が来られます。キリストご自身です。

これは将来の預言ですが、その前兆というものを信じたいと思います。エジプトには、古からコプト教会と呼ばれる教派がありました。彼らは初代教会からの殉教の精神を受け継いでいます。今年の初め、リビアでイスラム国によって斬首された若者たちもコプト教徒です。そして、他の福音派の教会なども数多く出て来ています。ムスリムの国なので迫害が厳しいですが、聖霊の力強い働きがあります。

19:21 そのようにして主はエジプト人にご自身を示し、その日、エジプト人は主を知り、いけにえとささげ物をもって仕え、主に誓願を立ててこれを果たす。19:22 主はエジプト人を打ち、打って彼らをいやされる。彼らが主に立ち返れば、彼らの願いを聞き入れ、彼らをいやされる。

主は打たれました。しかし、それは彼らに癒しを与えられました。これこそが、主のご目的でした。主が打たれたのは、彼らを滅ぼすためではなく、むしろ救われるためです。打つのは、彼らが自分により頼む者が、主の他にはないようにならざるためでした。どうでしょうか？私たちが、エジプトのように心が萎えるという経験をしておられるのでしょうか？他の人たちをいろいろ、言い合った。でも埒が開かなかった、という経験があったかもしれません。そして、自分の頼りにしていた仕事、あるいは人がいなくなってしまう、ということがあるかもしれません。そして今の問題について、いろいろな専門家に当たったが、これも埒が開かなかったということもあるでしょう。けれども、それらがすべて、「わたしが主だ、わたしが救い主だ」という神からの声であったということです。打たれても、それは癒されるためなのです。

2C 三国の祝福 23-25

そして、とてつもない祝福の幻が次にあります。

19:23 その日、エジプトからアッシリヤへの大路ができ、アッシリヤ人はエジプトに、エジプト人はアッシリヤに行き、エジプト人はアッシリヤ人とともに主に仕える。19:24 その日、イスラエルはエジプトとアッシリヤと並んで、第三のものとなり、大地の真中で祝福を受ける。19:25 万軍の主は祝福して言われる。「わたしの民エジプト、わたしの手をつくったアッシリヤ、わたしのものである民

イスラエルに祝福があるように。」

ここの箇所について、午前礼拝でお話ししましたのでぜひメッセージを聞いてください。なんとすばらしい、神の恵みなののでしょうか？ユダに敵対していたアッシリヤが主に仕えます。そしてユダを誘惑となっていたエジプトが主に仕えます。そしてイスラエル自身が主に立ち帰り、彼らがアッシリヤやエジプトが主に仕えるのを手助けする神の祭司的な位置にいます。私たちの生活でもこうなることを願います。私たちの敵が、神の恵みによって主に仕えることを願います。私たちが依存していた同じものから出てきて、同じように主に仕えるようになることを願います。私たちは神に対する祭司であります。

3A 裸の徴 20

イザヤは、いつも主から幻が与えられると、それが現実の生活に当てはめられるのか、応答しているのかを示すように主から促されています。ここまではっきりと、主ご自身を頼りにすれば、いずれエジプトも、アッシリヤも主に仕えるようになるという確信を与えようとされたのに、それにどう応答するかという肝心のところで失敗することになります。

20:1 アッシリヤの王サルゴンによって派遣されたタルタンがアシュドデに来て、アシュドデを攻め、これを取った年、**20:2** そのとき、主はアモツの子イザヤによって、語られた。こうである。「行って、あなたの腰の荒布を解き、あなたの足のはきものを脱げ。」それで、彼はそのようにし、裸になり、はだして歩いた。

サルゴン二世が紀元前 711 年に、ペリシテ人の町アシュドデを取りましたが、それから三年間、この奇妙な行動を取るようにイザヤに命じています。普通、預言は言葉を語ることによって行なわれます。けれども、聖書の中には、このような人々の注目を引き寄せるための象徴的行為を行なうことによって、預言しなさいと主が命じられるところがあります。エレミヤも少し行いましたし、預言者エゼキエルは、大変でした。左脇を下にして横たわり、390 日そうしていなければいけませんでした。そして次に右脇を下にして横たわり 40 日そうしなければいけませんでした。食べ物、人の糞を燃料にして麦類を焼けと言われます。普通なら見向きもしない人々が、このへんてこなパフォーマンスを見て、さすが質問するのです。「これはどういう意味だ？」と。これが、行動によって預言を行なうことの目的です。ところで、「裸になれ」と主は命じられます。これは、すべて、素っ裸になることではなく、いわゆる今の下着は身につけていました。

20:3 そのとき、主は仰せられた。「わたしのしもベイザヤが、三年間、エジプトとクシュに対するしるしとして、また前兆として、裸になり、はだして歩いたように、**20:4** アッシリヤの王は、エジプトのとりことクシュの捕囚の民を、若い者も年寄りも裸にし、はだしにし、尻をまくり、エジプトの隠しどころをむき出しにして連れて行く。**20:5** 人々は、クシュを頼みとし、エジプトを栄えとしていたので、おののき恥じる。**20:6** その日、この海辺の住民は言う。『見よ。アッシリヤの王の手から救っても

らおうと、助けを求めて逃げて来た私たちの拠り所は、この始末だ。私たちはどうしてのがれることができようか。』』

クシュに対しても、エジプトに対しても主はイザヤを通して語られましたが、それを彼らは聞く耳を持ちませんでした。そこで、彼らがアッシリヤにとって一部が捕え移され、惨めな姿になることをイザヤが三年かけて伝えなさいと命じられていたのです。そして、この預言活動は、ユダの住民たちに対する警告でもありました。大事なのは、「人々は、クシュを頼みとし、エジプトを栄えとしていたので、おののき恥じる。」であります。クシュという力を頼みにしようとする者たちがユダの中にいました。またエジプトの栄えの中に潜り込めばよいと思っていた人たちがいました。それが、彼らが裸で連れて行かれるクシュ人やエジプト人を目の当たりにして、「私たちが、どうしてアッシリヤの手から逃れることができようか。」と嘆いているのです。

私たちがいつも、気をつけなければいけないのは、表面的に知識的に、御言葉を読んでいくことです。終わりの日にどのように物事が展開していくのだろうか、と読んでいくのは必要な時もあります。しかし大事なのは、今の自分たちに将来と希望を与える神のご計画によって、力が与えられているか、知恵が与えられているか、ということであります。このことは、表面的に感動して聞いているのでは、決して得られないものです。しっかり考えて、果たして自分の内に、エジプトやクシュに頼るユダの民のようなものがないだろうか、それを探るのです。実際の脅威、試練に遭えば、その時に自分がどこに立っているのか、明らかにされます。そのためにも、主はこのような試練が起るのとお許しになっています。主によって心を探っていただきましょう。そして、聖めていただきましょう。